体育方法専門分科会の活動を顧みる

永嶋 正俊

Review of research activities of division on sports coaching methods

Masatoshi Nagashima

Key words : practical study, various sports

(Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 50: 91-104, January, 2005)

キーワード：実践的研究，スポーツ種目

はじめに

（社）日本体育学会編集委員会の『体育学研究』創刊50周年記念特集企画の原稿依頼に沿って、体育方法専門分科会の来し方について報告する。本分科会の創立から今日まで携わって来られた他の諸学兄もおられるので、果たして、その任に値する内容となるか些か心もとないがお許しいただきたい。

Ⅰ 創立とその経緯

ここでは、まず本分科会を創設し、初代世話人代表になられた笠井恵雄先生の回顧をひもとくこととする。

（1）日本体育学会の発足当初の発表形態が1955年の第6回学会大会から、発表部門制へと変更され、＜指導に関する部門＞もその一つとして設けられた。そのときから、指導に関する論文の数は発表部門の中で最も多く約60題だった。当時の論文の内容は科学的というよりも、主観的なもの

も少なくなかった。

（2）1966年の春に当時の加藤橘夫理事長と水野忠文常務理事との協議において＜指導に関する部門＞の専門分科会を創ることを提唱し、両氏の賛同を得た。そこで、同年の東海大学での学会大会の総会において＜指導に関する研究領域＞をより発展させるために「体育方法専門分科会」の創設を提案し、賛成と承認を得て、笠井恵雄世話人代表のもと東京教育大学体育学部（当時）に事務局を置いて発足した。

（3）1968年9月の第19回大会総会で、体育方法専門分科会の設立が認められ、1969年からこれまで称してきた＜指導に関する研究領域＞に代わって、“体育方法”という研究領域で活動することになった。分科会を設立した当時には“体育方法”という概念の検討を深く行うことなく、その頃の発表題目を総括して選んだ（笠井，1977）。

（今日なお“体育方法”の概念が多面性・多様性をもってとらえられがちなのは、この分科会創立時の事情に起因しているのかも知れない。）

（4）発足当初から学会大会の発表部門にあった＜指導に関する研究領域＞の内容を受けて諸研究が発表、報告された。そこには大きく分けて、

二つの研究分野が含まれていた。一つは運動技術そのものの分析的研究や各種の運動の習熟過程の研究であり、他は各種運動種目の指導や体育学習に関する研究であった。この両面の研究は前者が自然科学的な研究であるのに比して、後者は主に教育学的方法を中心とする人文科学的研究であって、両者は異なるものであるが、関係の非常に濃い間柄にある。一般的に言えば、前者は素材としての運動自体の研究であり、後者は運動を利用としての教育として、基礎科学と応用科学という関係にあって、前者は後者を助け、指導に貢献するところが大きいと解釈されたようだ(笠井, 1997)。

(5) 日本体育学会の中で、〈指導に関する研究分野〉が学会大会の研究発表者のために置かれて、体育やスポーツの指導に関する各種の研究がここで発表されてきた。分科会となった理由としては、次のようなことが挙げられる。

①他の研究分野が専門分科会をもち、組織的に研究を始めたのに、〈指導に関する研究分野〉だけは分科会が設けられていなかった。研究発表の題目数は他の分野に比較して多く、その研究内容や対象も体育実践とのかかわりが強いため、複雑で、広く、研究するには条件付けなどが極めて困難な問題があったりして、研究方法が不備で弱点をもつものが目につくことも言われていた。②このようなことと、この分野が体育・スポーツの中で重要な研究領域であることを考えて、遅ればせながら専門分科会をつくらねばと考えた。③また、従来のこの分野の研究発表の傾向のうち、各種の運動技術の科学的研究、合理的な指導法、体育学習の指導法がとくに目立っていたため、これらの3つを、主要内容として一層研究を深めようと考えた(笠井, 1975)。

(6) 分科会の将来的なねらいとしては、〈運動技術ないし運動方法学の研究〉と〈体育の学習指導の研究〉は設立趣旨からいっても継続していくことが望ましい。また、最近の体育科教育学(教授学)研究の強い機運を盛り上げて、分科会を二つに分けることが必要になったと思っている。何れにしても、初期の設立動機であった研究の質を高めることについては、分科会として責任をもつ

て一層進めていく必要を感じているが、会員の構成からいって、一方は運動学的研究が多く、自然科学的研究法を用いるのに対し、他は教科の目的・目標論、学習者論、課程論、教授・学習論、評価論など人文・社会科学的研究法を用いるということである。どうしても研究する会員が分離する傾向にあるのは止むを得ない発展の方向ではないだろうか(笠井, 1977)。

以上のことから、次のことが明らかになった。

(1) 本分科会は1968年の第19回学会大会総会で設立が承認された。

(2) 日本体育学会発足当初からあった〈指導に関する研究領域〉に代わって“体育方法専門分科会”を創設した。

(3) 体育方法専門分科会を設立した当時には、“体育方法”という概念の検討を深くおこなうことなく、その頃の発表題目を総括してこの名称を選んだ。

(4) 「専門分科会」としては、当時の〈指導に関する研究〉の内容を受けて研究を進めることとした。そこには大別して二つの研究分野があり、一つは運動技術の分析的研究や各種運動技術の習熟過程の研究で、他は各種運動種目の指導や体育学習指導に関する研究であった。

(5) 本分科会の今後の方向として、〈運動技術ないし運動方法学の研究〉と〈体育の学習指導の研究〉は分科会設立の趣旨から継続していくことが望ましいが、体育科教育学(教授学)研究の強い機運を考えると分科会を二つに分けることが必要になった。(因みに、体育科教育学専門分科会は体育方法専門分科会創設から10年後に分離独立した。)

II 体育学会大会における『一般研究発表』演題数の推移

表1は日本体育学会が公にしている「日本体育学会50年のあゆみ」の抜粋である。これを通覧すると、次のようなことが読み取れる。

(1) 専門分科会別の発表演題数を見てみると、第21回大会の「体育方法」は183で全発表演題

表 1 学会大会の開催場所・参加者数等

年次	回	開催場所	発表演題数	部門別演題数														
				原	史	社	心	生	バ	経	発	測	方	保	教	人		
1950	昭和 25	1	東京大学 (本郷)															
1951	26	2	東京大学 (本郷)															
1952	27	3	東京大学 (本郷)															
1953	28	4	名古屋大学・名古屋工大															
1954	29	5	東京学芸大学															
1955	30	6	京都大学															
1956	31	7	中央大学															
1957	32	8	久留米大学															
1958	33	9	日本体育大学															
1959	34	10	大阪大学															
1960	35	11	早稲田大学															
1961	36	12	愛知県立文化会館															
1962	37	13	慶應義塾大学	400	12	26	35	53	55	23	17		76	63	28			
1963	38	14	同志社大学															
1964	39	15	日本大学	305	5	23	28	4	43	34	17	18	43	35	12			
1965	40	16	北海道大学															
1966	41	17	東京大学 (駒場)															
1967	42	18	大阪大学															
1968	43	19	東海大学	754														
1969	44	20	広島工業大学	689														
1970	45	21	国士舘大学	717	31	31	61	87	86	52	31	30	70	183	31			
1971	46	22	日本体育大学	561	26	32	37	52	79	49	33	30	58	125	40			
1972	47	23	福岡大学	539	22	32	30	52	74	45	30	24	60	120	22			
1973	48	24	中京大学	466	15	28	28	34	57	40	12	29	42	81	16			
1974	49	25	東京工業大学	530	31	34	43	52	69	60	41	28	50	95	27			
1975	50	26	天理大学	564	35	44	41	54	84	48	42	32	53	102	29			
1976	51	27	東北大学	496	24	26	45	29	83	52	41	22	45	95	34			
1977	52	28	山梨大学	576	30	34	42	29	113	65	29	31	52	120	31			
1978	53	29	高知大学	539	20	29	53	3	110	42	27	36	38	128	26			
1979	54	30	金沢大学	592	25	35	42	35	116	60	26	44	37	102	26	44		
1980	55	31	東京学芸大学	654	25	38	45	48	122	51	23	37	41	111	32	81		
1981	56	32	神戸大学	651	17	39	39	42	120	60	27	26	51	109	24	97		
1982	57	33	東京大学 (駒場)	790	22	38	54	54	155	63	34	46	50	150	32	92		
1983	58	34	北海道大学	699	25	30	34	4	141	61	27	52	52	147	34	56		
1984	59	35	鹿児島大学	766	18	38	35	50	160	68	28	36	44	158	37	91		
1985	60	36	岐阜大学	796	17	34	41	6	181	64	20	46	61	166	34	82		
1986	61	37	筑波大学	836	14	43	60	64	183	70	19	47	45	186	38	67		
1987	62	38	立命館大学	746	16	32	53	61	150	55	33	48	47	155	25	71		
1988	63	39	福島大学	739	21	27	56	69	146	49	20	44	39	158	31	79		
1989	平成 1	40	横浜国立大学	707	22	16	43	59	132	44	26	38	40	176	27	7	14	
1990	2	41	岡山大学	719	23	24	50	68	130	35	16	41	49	177	21	73	12	
1991	3	42	富山大学	757	16	29	46	73	136	40	29	40	43	154	30	70	13	
1992	4	43	大妻女子大学	691	16	17	42	80	126	44	27	32	46	137	28	70	11	
1993	5	44	大阪国際交流センター, 他	649	12	18	50	58	118	51	28	31	41	133	21	78	10	
1994	6	45	山形大学	514	6	19	27	55	84	28	28	28	42	111	15	63	8	
1995	7	46	群馬県民会館, 他	524	11	17	35	50	10	37	30	18	41	108	14	57	6	
1996	8	47	千葉大学, 他	531	14	16	53	47	90	39	31	19	31	99	16	63	13	
1997	9	48	新潟大学, 他	528	13	22	42	50	77	34	24	26	31	112	29	54	14	
1998	10	49	愛媛大学, 他	514	12	22	32	46	79	39	29	26	28	101	23	69	8	
1999	11	50	東京大学 (駒場)	839	14	13	36	54	168	35	33	28	57	119	36	51	13	
2000	12	51	奈良女子大学	375	8	13	22	44	33	30	24	25	27	83	14	46	6	
2001	13	52	北海道大学	432	11	9	28	50	56	38	29	26	33	83	19	44	6	
2002	14	53	埼玉大学	425	7	18	32	45	52	29	22	22	37	87	17	44	13	
2003	15	54	熊本大学	470	17	21	40	56	50	48	27	22	46	65	21	44	13	
2004	16	55	信州大学	513	17	18	32	58	43	53	32	27	46	90	25	64	8	

数の25.5%を占める、顕著な演題数であった。「体育方法専門分科会」が新設されたことを受けて、従来の＜指導に関する研究分野＞の発表に加えて多くの会員の本分科会における研究発表がなされたものと思われる。

(2) 第21回大会以降、第29回大会まで発表演題数は他の専門分科会のそれを上回っている。体育学会の会員の多くは大学教員として体育の授業、体育・スポーツの実践指導に携わっていることを思慮すれば、体育・スポーツの効果的な指導を探るティーチング、トレーニング、コーチングの研究とその発表が多く見られるのは当然の成り行きだったと思われる。

(3) 第30回大会から第36回大会まで（第34回を除く）の専門分科会別の発表演題数は運動生理学専門分科会が体育方法専門分科会よりも多い。このことは、体育・スポーツの基礎科学としての運動生理学の研究が盛んになったことと、本分科会から分離する形で“体育科教育学専門分科会”が新設されたことによる影響ではないかと考えられる。

本分科会の発足当初から、従来の＜指導に関する研究分野＞には、大別して『運動技術ないし運動方法学の研究』と『体育の学習指導の研究』があった。研究のさらなる専門性を求めて“体育科教育学専門分科会”が10年を経て分離、新設されたことは当然の成り行きであったと思慮できる。

(4) 第37回大会以降第55回大会までの19回のうち、第50回記念大会で運動生理学専門分科会の演題数（168）が体育方法学専門分科会の演題数（119）を上回った以外、18回の学会大会での一般研究発表演題数は本分科会が常に最多であった。体育科教育学専門分科会の分離、新設から7年を経て、体育・スポーツの実践指導に携っている多くの本分科会所属会員が、運動技術・スポーツ技術の方法学的研究に取り組み、それが多くの研究の触発につながり、発表となったと思慮できる。

以上のように、体育・スポーツの方法学的研究、実践科学的研究が着実に根を下ろし、継続的に多

くの研究・発表がなされてきていると見るができる。これらの研究結果を実際の体育・スポーツの指導・コーチングに生かし、更なる実践的指導の成果、コーチングの成果を挙げることが期待される。

III 日本体育学会第21回大会と第55回大会の『一般研究発表』の比較

第21回大会と第55回大会の一般研究発表の傾向を、本分科会のコード表をもとに、発表テーマの内容を勘案して新たに項目を加えた分類表の頻数から概観してみる（表2参照）。なお、分類項目ごとの頻数は発表テーマから算出した。体育方法総論、体育方法論、運動方法の「網」の何れの「目」に合う研究内容で、「種目」は何であるか等を個々の発表ごとに算出した。例えば、「棒高跳びの局面構造に関する実践的研究」のテーマの場合、陸上競技、技術分析（動作分析）、実践研究のそれぞれの項目に一つずつ加算して算出した。また、「平泳ぎ下肢動作の三次元動作分析」のテーマの場合は水泳、技術分析の項にそれぞれ加算し、「庭球の指導に関する研究」のテーマの場合は球技、指導の項にそれぞれ加算した。

以上のような処理のしかたで項目別に頻数を算出した結果、表2に示すように項目別頻数は第21回大会では317、第55回大会では178であった。第21回大会は第55回大会の2倍の演題数であった。

第21回大会では、従来より＜指導に関する分野＞として広範囲にわたり、多くの発表がなされていたが、新たに「体育方法専門分科会」として発表分野が特定されたこともあって、さらに多くの発表数になったものと思慮できる。

第55回大会の発表数は第45回大会以降の学会大会の『一般研究発表』総数の漸減傾向を受けて、本分科会も減少傾向を示している結果とみることができよう。（項目毎の比較をするのにそれぞれ100分率を算出して比較検討した。）

体育方法総論では、第21回大会が2.2%、第55回大会が0.5%で運動特性論、指導方法論などの

表2 体育方法専門分科会 コード表をもとにした項目ごとの発表頻度

類	網	目	第21回大会 ('83)	第55回大会 ('90)
体 育 方 法	体育方法総論	原理・歴史		
		体育方法研究		
		運動発達論		
		運動特性論	0.3%	0.5%
		指導（コーチング）方法論	1.0	
		指導者（コーチ）論		
		レクリエーション論		
		施設・用具論	0.6	
		体力・精神・技術論	0.3	0.5
		その他		
			2.2%	0.5%
	体育方法論	幼年期	1.5	1.6
		青少年期	5.3	3.0
		中高年期	0.6	1.0
		障害者	0.9	3.0
		学習（体験学習）	1.5	3.4
		練習法	1.2	0.5
		評価	0.6	0.5
		その他	4.4	1.0
			16.0%	14.0%
	運動方法論	技術分析（動作分析）	7.7	10.2
		ゲーム分析（競技分析）	4.4	6.2
		体力・精神・技術トレーニング	6.0	4.0
		ルール・審判	0.3	2.2
		技術・戦術		1.1
		安全・事故防止	0.3	
		習熟過程	2.8	1.1
		実践研究・報告	1.8	3.3
		比較研究	5.1	5.1
		運動強度	0.3	1.6
		調査・意識	4.7	4.5
		指導・実践指導	5.7	3.3
		その他	1.5	4.5
			40.6%	47.1%
	(注) 網と目を組み 合わせてコー ド番号とする.	体操・基本運動	1.2	0.5
		体操技術（体操・競技）	3.7	0.5
		陸上競技	3.7	1.6
		水泳競技（水泳・水中運動）	2.2	10.1
		格技	2.8	1.6
		球技	13.2	14.6
		ダンス（表現運動）	4.8	1.6
		野外運動	2.5	3.9
		その他	6.8	3.3
			40.9%	38.2
		項目別総数	99.7%	99.8%

基礎的な研究は非常に少ない。体育方法論では、第21回大会で16.0%、第55回大会で14.0%であり大きな差は見られないが、第21回大会では中学・高校生を対象にした授業関連のテーマが多く、第55回大会では障害者に対する研究発表の増加が見られた。

運動方法論では、第21回大会で40.6%、第55回大会で47.1%であり、第55回大会の方が多かった。特に、技術分析、ゲーム分析に関する研究の増加が著しく、ルール・審判の発表も増加している。第21回大会では習熟過程、指導・指導実践、体力・精神・技術トレーニング等が第55回大会より多かった。

これらの結果は体育・スポーツ研究の現代的な流れの中で、体育・スポーツ方法学的研究の傾向と見ることができる。これは、体育・スポーツ界が求めている実践的な成果に結びつく実践科学的な体育・スポーツ方法学の研究が多くなってきた傾向とも換言でき、今後も継続されていくものと思慮できる。

運動・スポーツ種目から見てみると、第21回大会で40.9%、第55回大会で38.2%で大きな差異は見られない。種目の括り方にもよると思われるが、球技が第21回大会で13.2%、第55回大会で14.6%と著しく多いのは、球技に関わる研究者（コーチ）が多いことを意味しているのであろうか。第21回大会よりも第55回大会で多くなった種目は水泳競技（水泳・水中運動）であり、顕著に増加している（2.0%→10.1%）。逆に第21回大会よりも第55回大会で減少している種目としては体操競技（3.7%→0.5%）、陸上競技（3.7%→1.6%）、ダンス（4.8%→1.6%）などが際立っている。

研究対象としての種目別の増減は、個々の種目の普及度や国際大会的なオリンピックや世界選手権大会の成績等も要因として考えられる。また、別の要因として種目単位の研究組織（学会や研究大会）の活動の有無が本分科会の発表数に影響しているのではないかということも考えられる。種目別発表数の増減を一面的に見ることは、体育・スポーツ界の研究の実態を見誤ることにもなりか

ねないので、慎重な考察が必要である。また、これのみならず体育方法専門分科会の『一般研究発表』のテーマ、内容についての検討にあたっても同様であることを付言しておきたい。

IV 学会大会におけるシンポジウムの推移

本分科会のシンポジウムは第22回大会から第55回大会まで、本分科会独自か他の分科会と合同して開催してきている。（第26回大会は『課題研究』に「体育方法」として参加し、第50回記念大会ではスポーツ方法学会として、共催シンポジウム8セッションに参加している。）

以下に学会大会ごとのシンポジウムのテーマを略記してみる。

第22回大会

〔A〕サッカー技術の発達過程について

- ①戦前の日本におけるサッカー技術の発達
- ②戦後の日本におけるサッカー技術の発達
- ③外国におけるサッカー技術の発達

〔B〕効果的な体育実践の指導法

- ①体力を中心として
- ②技能を中心として
- ③人間性を中心として

第23回大会

〔A〕わが国におけるスポーツ技術の発達過程

- ①ラグビー
- ②体操競技
- ③戦後の一般スキー

〔B〕体育科教育学の基本構想について

- ①体育科教育学と基本科学
- ②学校教育における教科構造の中の体育科の位置
- ③体育科教育の学習内容について
- ④教員養成大学・学部における教職・教科に関する専門科目及び体育科教育について

第24回大会

〔合同〕運動技術の習熟過程について

内野手の投球動作の成熟過程

〔合同〕小学校正課体育における適正な運動量はどのくらいか

第25回大会

球技におけるゲームの分析法—記録の仕方と整理法—

- ①バスケットボール
- ②バレーボール
- ③ハンドボール
- ④野球について

第26回大会

〔課題研究〕体育学研究の成果と課題（体育方法）

第27回大会

スポーツ技術の特性とそのコーチ

- ①陸上競技
- ②剣道
- ③サッカー

第28回大会

スポーツ技術の特性とそのコーチ

- ①陸上競技・長距離
- ②卓球
- ③柔道・クラブ強化のための

第29回大会

〔A〕社会体育における指導上の諸問題

- ①国立競技場におけるスポーツ教室
- ②少年スポーツについて
- ③中・高齢者の健康マラソン
- ④家庭婦人の「健康・体力づくり」トレーニングについて

〔B〕体育の「授業研究」の現代的課題と今後の研究のあり方

- ①授業理論の先行研究について
- ②体育の「授業研究」における現代的・方法論的課題
- ③体育の授業研究の今後のあり方

第30回大会

体操と国民スポーツ

- ①体操の概念
- ②国民スポーツとしての体操
- ③古い体操・新しい体操
- ④欧州の体操とその傾向

第31回大会

ダンスと国民スポーツ

- ①フォークダンス（民踊）と国民スポーツ
- ②芸術ダンス（舞踊）と国民スポーツ
- ③学校ダンス（教育ダンス）と国民スポーツ

第32回大会

スキーと国民スポーツ

- ①スキー技術について
- ②学校スキーと国民スポーツ
- ③歩くスキー

第33回大会

スポーツ選手の男女差とコーチについて

- ①生理学からみた男女差
- ②長距離走のコーチと男女差
- ③バレーボールのコーチと男女差

第34回大会

スポーツ選手の男女差とコーチについて

- ①バスケットボールのコーチと男女差
- ②テニスのコーチングと男女差
- ③体操競技の男女差とコーチ

第35回大会

スポーツ選手の男女差とコーチングについて

- ①体力における女子の特性
- ②競泳競技のコーチと男女差
- ③陸上競技コーチングの男女差の諸問題

第36回大会

大学における体育・スポーツと指導者の養成について

- ①改めて問われている大学体育の意義 —その理念論と効果論
- ②大学体育・スポーツと指導者の養成 —就職難の時代に寄せて
- ③大学体育・スポーツと指導者の養成
- ④大学スポーツと指導者の養成について

第37回大会

大学における競技スポーツのあり方と指導

- ①大学の競技スポーツをトップクラスにするための問題点
- ②大学の競技スポーツと指導者
- ③大学における競技スポーツの日米比較

第38回大会

大学における一般体育・スポーツの指導—指導の科学化を含めて—

①体育及び大学体育の新構想 —21Cに向けて—

②「大学」の特性を生かした体育指導

③大学における一般体育・スポーツの指導 (バレーボール)

④大学一般体育におけるテニスの指導について

第39回大会

「生涯スポーツ」の在り方を探る

①大学を生涯スポーツの場に

②生涯スポーツと大学体育

③高齢者の体力の現状とスポーツの貢献

第40回大会

必修に値する大学体育とは何か

①必修に値する大学体育とは

②大学一般体育 (保健を含む) に関する発想の転換

③必修に値する大学体育とは

第41回大会

生涯体育・スポーツにおける大学体育の在り方

①体育そのものの基本的な在り方から

②特色ある大学教育の実践例から

③アメリカの大学体育から

第42回大会

大学体育の方法を探る

①目的・目標を考える立場から

②自己評価の立場から

③カリキュラム・授業・成績評価の立場から

第43回大会

大学体育と新カリキュラム

①慶応義塾大学の場合

②設置基準の大綱化と体育の改善

③大学体育における「非専門科目」としての体育の教育

第44回大会

コーチングを考える—その1—「世界に勝つために」

①サッカー日本代表チームのコーチング

②現役選手の立場から

③コーチと競技者としての両面から

第45回大会

コーチングを考える—その2—「世界に勝つために」

①金メダルまでの経緯 (スキー)

②合理的なトレーニングと人間的交流がトップを支える (スケート)

③自転車はF1レーシングマシンになれるか (テニス)

第46回大会

〔A〕コーチングを考える—その3—「世界に勝つために」

①日本のコーチングに望まれるもの—アメリカ留学を通して— (バレーボール)

②日本人選手を指導して (飛び込み)

③日米バスケットボールの比較と違い

〔B〕体育方法専門分科会の発展的な在り方考える

①体育方法専門分科会の発展的な在り方

②アメリカに見られる体育・スポーツ学の体系と諸独立学会の置き方

③ドイツにおけるスポーツ科学の体系論

第47回大会

コーチングを考える—その4—「世界に勝つために」

①アトランタオリンピック出場までの強化 (サッカー)

②アトランタオリンピック出場を果たして (バスケットボール)

③ワールドカップ '95チーム第4位からの出発 (シンクロナイズドスイミング)

第48回大会

コーチングを考える—その5—「世界に勝つために」

①「体験や勘」を超えるコーチングへ (スケート)

①ニッカネンを超える鳥人計画の10年 (スキー・ジャンプ)

②体力面の強化およびコーチ陣との接点 (スキー・ノルディック)

第49回大会

長野パラリンピックを考える—その成果と課題をめぐって—

- ①国際パラリンピックの全体像
- ②長野パラリンピックを終えて
- ③長野パラリンピックへの道のり

第50回大会〔体育学会50回記念大会〕

スポーツ方法学会として諸学会との共催シンポジウム8セクションに参加

第51回大会

〔合同〕スポーツ科学の21世紀への提言—シドニーオリンピックに学ぶ—

アトランタからシドニーへ、そしてアテネに向けて（体操競技）—日本男子体操、世界への再挑戦—

第52回大会

競技力向上を目指す女性スポーツのコーチング

- ①女子柔道選手を対象とした場合
- ②ソフトボール競技のシドニー五輪までの選手強化と今後に向けて
- ③シンクロナイズドスイミングの競技力向上を目指す女子選手のコーチング

第53回大会

21世紀の日本のサッカー・世界のサッカー—2002FIFAワールドカップを終えて—

- ①日本サッカーの技術レベルの現状・課題
- ②世界のサッカーの現況
- ③日本のスポーツ界におけるサッカー

〔合同〕体育・スポーツ指導者の役割

体育・スポーツの文化特性に係る水泳指導法の転機

第54回大会

〔A〕日本水泳 アジアからアテネオリンピック～世界の頂点へ～

- ①強化サポートスタッフの立場から
- ②指導者の立場から
- ③これまでのアドバイスを振り返って
- ④これまでの強化を振り返って

〔B〕熊本が生んだマラソン王「金栗四三」を語る

- ①地元で一緒に活動したジャーナリストの立場から
- ②地元で一緒に活動した市民マラソンランナーの立場から

- ③オリンピック・マラソン選手の立場から

- ④オリンピック・マラソン選手の立場から

第55回大会

〔A〕日本水泳 アジアからアテネオリンピック～世界の頂点～（II）—「チーム北島」はアテネオリンピックでどう戦ったか—

- ①演者5名による対話、質疑応答形式

〔B〕実学的な「泳ぎ」の指導法を問う—日本泳法と近代泳法の視点から—

- ①演者3名による対話、質疑応答形式

以上の本分科会のシンポジウムを概観すると、つぎのようなことが読み取れる。

（1）全体を通して見たときに、大きな流れとしては、常に体育方法としての運動技術・スポーツ技術を据えた実践科学的な視野に立ってテーマが設定され、報告・討論・討議がなされてきた。

（2）そのときどきの体育・スポーツ界に関わる教育改革（主として大学体育の改変）の流れやスポーツのビッグイベント（オリンピックやワールドカップ）に合わせたテーマ設定も目につく。

（3）生涯学習（生涯スポーツ）と大学の一般教養科目の必修科目として位置づけられていた“一般体育”との関わりやスポーツ種目ごとの生涯スポーツとの関わりを探るテーマも見られる。加えて、体育・スポーツ活動を支える基礎科学の研究成果（生理的・体力的等）を踏まえてのスポーツ選手の男女差とコーチングについてのテーマ設定も見られる。

（4）シンポジウムのテーマによってはシンポジストを球技種目・個人種目・対人種目・冬季種目等の中だけから数人を選び、種目特性の指導やコーチングの相違点や共通点を探ることをめざしたり、球技種目・個人種目・対人種目・冬季種目等からそれぞれ選んで種目特性による技術構造の相違点や類似点等から、それぞれの指導・コーチングの相違点などを探ることをめざしている。

（5）競技種目ごとのコーチングを探るのに、コーチの立場、選手の立場、研究者の立場等からのシンポジストによる種目特性に応じた発表・報告から、より有効なコーチングをめざしたり、我が

国と外国のコーチングの実際の比較からよりよいコーチングを探ることをめざしたりしてきている。

さらに、次のような読み取りもできよう。

(1) 第22回大会から第28回大会では、「スポーツ技術に関する」シンポジウムと見ることができる。第22回・23回大会では「スポーツ技術の発達過程」と題して、サッカー、ラグビー、体操競技、一般スキーについて討議されている。第24回大会では合同シンポジウムで、「運動技術の習熟過程」について討議している。第25回大会では、「球技のゲーム分析法—記録のしかたと整理法—」と題して、バスケットボール、バレーボール、ハンドボール、野球について討議されている。第27回・28回大会では「スポーツ技術の特性とそのコーチ」と題して、陸上競技、剣道、サッカー、陸上競技（長距離）、卓球、柔道について討議している。これらの「スポーツ技術」に関するテーマは本分科会が創立されて、分科会としてとくに扱う研究分野、その研究方法等についてひとつの方向性をシンポジウムを通じて分科会所属会員に示し続けてきた“あらわれ”と思慮できる。

(2) 第30回大会から第32回大会までの3回は「体操と国民スポーツ」、「ダンスと国民スポーツ」、「スキーと国民スポーツ」と題して行っている。現在では「国民スポーツ」という用語はあまり用いられなくなっているように思われるが、各種スポーツが日常生活の中にどのように位置づけられ、実際に行われるようになることの必要性に触れ、スポーツ実践活動の具体的例示について、高校や大学の正課体育・クラブ活動の関わりを中心に討議されている。レジャースキーの普及に合わせて、スキーの技術、学校スキー、歩くスキーが扱われているのはスキーズームに即したテーマであったと思慮できる。生涯学習・生涯スポーツについてのシンポジウムでもあったと換言できよう。

(3) 第33回大会から第35回大会までは「スポーツ選手の男女差とコーチング」のテーマで行われている。体育・スポーツ活動に関わる諸基礎科学の研究が進み、生理学的な性差や体力的な性差

等が明らかになるにつれ、スポーツ技術の指導・コーチングについての男女差が課題となるのは当然のなりゆきであった。シンポジウムでは生理学からみた男女差、体力における女子の特性などを踏まえて、種目特性に応じたコーチングの男女差について討議している。種目としては陸上競技、体操競技、競泳競技、バレーボール、バスケットボール、テニスが取り上げられている。当時、男子・女子が共に行っていた主な種目のコーチングの実際を踏まえて共通点や相違を示し、課題を明らかにして、その課題解決策を討議するシンポジウムであった。男女差を考慮したコーチングの実践研究はその後も継続され、とくに女子の技術向上に大いに寄与したことは既知の通りである。

(4) 第36回大会から第43回まで8回に渡って「大学体育について」のシンポジウムを行っている。当時の大学改革の流れの中での“一般体育”の改変に対する日本体育学会の対応に呼応するテーマであり、本分科会所属会員のニーズに応えるシンポジウムであったと思慮できる。とくに、“一般体育”についての現状認識の上に立った改変を意図した討議内容が多く見られる。「改めて問われる大学体育の意義」「大学体育の新構想—21世紀にむけて—」「生涯スポーツと大学体育」「必修に値する大学体育とは」「大学体育と新カリキュラム」「生涯体育・生涯スポーツにおける大学体育の在り方」等々である。具体的には従来の“必修体育”の見直し・再検討を試み、学生の選択科目としての体育科目に値する内容をいかに構築するか等について生涯スポーツや生活体育の実例を挙げながら真摯な、かつ白熱した討議がなされた。大学教員である多くの本分科会所属会員には大きな示唆となり、個々の大学での“一般体育”の在り方に資するところは大であったと思慮できる。

(5) 第45回大会から第48回大会までの5回に渡って、「コーチングを考える—世界に勝つために—」とのテーマで行っている。サブテーマの「世界に勝つために」の討論に見合う競技種目とシンポジストで行われ、体育方法・スポーツ方法の核であるコーチング、とりわけ我が国における

各種目のトップコーチングの実際を明らかにし、次のステップアップを志向する討議のシンポジウムであった。種目としてはサッカー、スキー、スケート、テニス、バスケットボール、バレーボール、飛び込み、シンクロナイズドスイミングで、何れも世界選手権大会やオリンピックで好成績を取めた選手・チームのコーチや監督の発表が続いた。現役監督、現役コーチの実体験を踏まえた強化・育成論、現役選手の立場からのコーチングについての意見、諸外国のコーチングと我が国のそれとの比較の上に立ったトップコーチ実践論、バックアップ研究者の立場からのトップコーチ観など、多様なシンポジストの発表内容から我が国のトップアスリートのコーチングの実際を知ることができた。これらの討論・討議内容は各種目のトップコーチ実践論にとどまらず、他種目のトップコーチへの転用、あるいは技能レベルに応じたコーチングへの活用もでき得る有意義なシンポジウムであったと思慮できる。

(6) 第49回大会では「長野パラリンピックを考える」というテーマで、本分科会として初めて外国からシンポジストを招聘した。Robert Steadward 国際パラリンピック委員会委員長（初代）に「国際パラリンピックの全体像」を示してもらい、日本パラリンピック技術強化委員長に「長野パラリンピックを終えて」、金メダリストに「長野パラリンピックへの道のり」というテーマでそれぞれ発表してもらうことができた。今なおよく知られていない部分のあるパラリンピックについての全容、コーチング、プレイヤーの実体について討論・討議ができ、障害者のスポーツやその指導・コーチングについて目を開くことができた有意なシンポジウムであった。（なお、R. Steadward 会長から「冬季パラリンピック—その成果と課題をめぐって—」と題してのキーノートレクチャーも聴くことができた）。

(7) 第50回大会は記念大会であり、体育・スポーツに関わる独立関連学会との共催的学会であったので、本分科会独自のシンポジウムは行わず、日本スポーツ方法学会として共催シンポジウム8セクションにシンポジスト及び司会として会員が

登壇している。

また、第51回大会では、合同シンポジウム「スポーツ科学の21世紀への提言—シドニーオリンピックに学ぶ—」のシンポジストとして「アトランタからシドニーへ、そしてアテネに向けて（体操競技）—日本男子体操、世界への再挑戦—」のテーマで登壇している。アテネオリンピックでの男子国体競技での金メダル獲得は鋭意、選手強化に力を尽くして来た体操協会の多くのコーチの努力の集積の成果と考えられる。種目特性に応じたトッププレイヤーが各自のパフォーマンスを最大限に発揮するにはトップコーチのコーチングが不可欠であり、体育方法・スポーツ方法学のコーチングの重要性が如実に実証されたと言えよう。

(8) 第52回大会では「競技力向上を目指す女性スポーツのコーチング」のテーマで行われている。近年とみに女性選手の国際大会での好成績が各競技種目で見られるようになったのをうけてのテーマ設定であった。「女子柔道選手を対象として」「ソフトボール競技のシドニー五輪までの選手強化と今後に向けて」「シンクロナイズドスイミングの競技力向上を目指す女子選手のコーチング」と題する3競技種目の女子の日本代表選手・代表チームのトップコーチングの実際を踏まえての討論・討議であった。種目特性に応じた女性特有の身体的・精神的・社会的な資質をいかに技術向上に活用できるか等を探りながらのトップコーチングの実践の発表内容には多くの示唆を得ることができ、時宜にかなったシンポジウムであった。

(9) 第53回大会では「21世紀の日本サッカー・世界のサッカー—2002 FIFA ワールドカップを終えて—」のテーマで、日韓共催のFIFA ワールドカップでの日本代表チームの活躍もあり、社会現象としても稀に見るスポーツ（サッカー）への国民的関心事となったことを受けてのシンポジウムであった。Jリーグの技術担当理事、サッカージャーナリスト、順天堂大学客員教授の3シンポジストにより、我が国のサッカーの来し方と現状、世界のサッカーの動向と日本サッカーの目指すものとその課題等について、一過性のブームに終わることなく世界のトップレベルに伍してい

く施策の提言にまで及ぶ討論・討議であった。

(10) 第54回・55回大会では「日本水泳 アジアからアテネオリンピック～世界の頂点へ～」(I) (II) のテーマで行われた。北島選手のコーチングスタッフのそれぞれの立場での実際の具体的な分担・協力内容とその成果をコーディネーターが質問ふうに見て、興味深いコメントを引き出す形式で進められた。一方的な発表だけでなく、次から次への質問と返ってくるコメントによってトップコーチングの真髄に触れることができたと思う。北島選手の世界新記録樹立に向けてのコーチングの全容、アテネオリンピックでの金メダルに向けたコーチングの極限まで待つ決断のしかた等を軸に討議された。専任コーチの苦悩・呻吟・決断、強化サポートスタッフチームのデータ処理(泳法・記録分析)、トレーナーチェック(指圧・針灸)、メディカルチェック(生理学的諸分析等)の結果のコーチへの報告・戦略の決定とその対応等を具体的に知り得た有意義なシンポジウムであった。結果を出したトッププレイヤーをサポートしたトップコーチ・スタッフの報告・発表には、他からは得ることのできないコーチングの実際に当たっての濃密かつ種々多々の示唆が得られた本分科会にふさわしいシンポジウムであった。

V 日本体育学会大会における キーノートレクチャーについて

体育方法専門分科会のキーノートレクチャーは、以下の7学会大会で行われた。

第40回学会大会

「体育方法における研究成果の総括」

第41回学会大会

「体育・スポーツ方法に関する基本的諸問題」

第42回学会大会

「体育・スポーツ方法と人間形成」

第43回学会大会

「体育スポーツ方法と健康・体力」

第48回学会大会

「人間の生活・生存と生涯体育・スポーツ研究」

第49回学会大会

「冬季パラリンピック—その過去・現在・未来—」

第53回学会大会

「日本のサッカーの来し方・行方」

第40回学会大会では本分科会が創立されて20年の節目にあたり、本分科会としての研究成果を総括し、今後の研究の方向性等についての討論がなされている。第41回・第42回・第43回・第48回の4回の学会大会では本分科会の「体育方法」について体育あるいはスポーツ界における方法(学習、トレーニング、コーチング)を如何に把握、実践すべきかを人間形成、健康と体力、生活・生存としての生涯体育・スポーツ等と関連づけて討論し、体育方法の方向性についての示唆を得た。さらに、第49回・第53回学会大会ではシンポジウムと関連させた内容であった。第49回大会のシンポジウムは「長野パラリンピックを考える —その成果と課題—」であった。そこで、パラリンピックについてR. Steadward 国際パラリンピック委員会委員長のキーノートレクチャーで理解を深め、長野オリンピックについてのシンポジウムの討論に結びつけて行われた。その意図は十分に果せたキーノートレクチャーであった。第53回のキーノートレクチャーもシンポジウムのテーマ「21世紀の日本のサッカー・世界のサッカー—2002FIFAワールドカップを終えて—」とリンクした内容であり、「日本のサッカーの来し方・行方」というテーマであった。ワールドカップの興奮・熱気をいかに持続し、世界に伍していくべきかをめぐる論述であった。

VI 月例研究発表会

本分科会所属会員により多くの研究発表の場を提供することと、研究活動を促すことを目的に「月例研究発表会」を現在まで続けてきている。この呼称は“月例”となっているが、実際は年4回の開催である。(諸事情により、年度によっては5回あるいは3回のときもあった。)発表内容は体育方法総論、体育方法論、運動方法論等の広範囲にわたり、運動・スポーツ種目の技術に関する

る発表が多かった。ときには特定のテーマを選定したり、運動・スポーツ種目を特定したりしての発表を依頼することもあった。

本研究発表会の1回における発表演題数はそのときどきの申し込み数で異なり、一定ではない。ほぼ2—3題のときが多く、4題のときもあった。また、テーマに沿った総論的な発表を初めに聞いているから2—3の「課題研究」（指定テーマ）の発表を行うこともあった。年度ごとの月例研究発表会の演題数は12題前後である。

また、本研究発表会は長く東京中心に首都圏で開催されて来た。しかし、全国の本分科会所属会員の研究活動の活性化をはかり、本研究発表会へのより積極的な参加を促すべく、年に1回は首都圏以外での開催を1998年から実施してきている。これまでに北海道、大阪、鹿児島、名古屋、金沢等で開催し、初期の目的は達成している。開催担当会員にはご苦勞をかける面もあるが、首都圏以外での本研究発表会は今後も継続していくべきであろう。

VII 「体育方法専門分科会会報」など

本分科会発足当初より年度ごとに『体育方法専門分科会会報』を刊行し、全所属会員に配布してきた。内容は分科会の前年度の決算を含む事業報告と月例研究発表会での発表抄録を収めている。以下、その内容を略記しておく。

1. 世話人会について

年間4—5回開催している。学会大会における一般発表形式の検討、シンポジウムのテーマ決定やシンポジストの選定、月例研究発表会の立案・実施案の検討、次年度の事業計画の審議、予算・決算の審議、分科会会報についての検討等が主な議事内容となっている。また、本分科会の活動の現状を踏まえ、今後の分科会としての日本体育学会内での研究の方向性や分科会所属会員のニーズにいかにか答えていくべきか等についての討議も行ってきた。

2. 月例研究発表会の発表論文の掲載

本分科会所属会員の月例研究発表会での口頭発表を何らかの形でペーパー化できないかという要望を受けて、上記した年度ごとの『会報』に載せることになった。月例研究発表会で発表された内容を論文にまとめたものを10編前後ずつ載せてきた。なお、1996年からは『体育方法研究報告』と改称し、従来の『会報』に収めてきた内容も含めた研究誌の一つとして刊行している。

おわりに

以上、粗雑ではあるが日本体育学会体育方法専門分科会の“足跡”を振り返ってみた。とくに本分科会所属会員各位には〈指導に関する研究領域〉として出発した本分科会の「原点」をいま一度ご確認いただき、各位の今後のご研究の「礎」にしていただければ幸甚である。

さて、周知のように、カイヨワ (Caillois, R.) は『プレイ』する人が求める楽しさの質の違いにより、『プレイ』をアゴン、アレア、ミミクリー、イリンクスの四つに分類した。これを本分科会が主要研究対象とする体育・スポーツの“実践現場”に当てはめてみると、【アゴン：競争】の要素が最も濃い。それはアゴンが1) 相手に勝利する、2) 記録更新やフォームの改良、3) 一度もできなかった課題ができる—という楽しさを包含しているからである (松田・宇土, 1988)。この3点は本稿で検証したように、いわばScienceの範疇でかなり解き明かすことが可能となった。ところが、今日なお“勝敗は時の運”と喩えられるように、体育・スポーツの“実践現場”では【アレア：運】の要素も依然として看過できない。言うならば、Scienceとは対極的位置づけとなるIntangibleの範疇である。『日本体育学会案内』によると、本分科会は‘Sports Coaching Methods’と英訳されている。つまり、本分科会の研究分野においてはScienceとIntangibleが混在していることになる。まさに「コーチングはScienceでもあり、Artでもある」といわれる所以であろう。本分科会における『研究』ではこのようなことにも留意

しておきたい。

ところで、伝えられるところによると、日本学術会議の機構改革が行われることに伴い、我々の体育・スポーツ分野に関わる研究推進・統括組織とでも言える日本体育学会はもとより、関連独立専門学会としての日本スポーツ方法学会も少なからず諸影響を受けるのは必至ではないかと推測される。そのような状況に揺るぎなき対応をしていくためには“同根同種”である本分科会と日本スポーツ方法学会のこれまで以上のリンケージが不可欠ではないかと思われる。このことも本分科会所属会員各位にご一考いただければと願っている。

なお、本稿の作成にあたっては、本分科会世話人会・水谷豊会員および城後豊会員に資料収集等

でご協力をいただいた。ここに記してお礼申し上げます。

文 献

笠井恵雄（1973）体育方法学研究の動向．体育の科学，23：508-511.

笠井恵雄（1975）体育方法専門分科会のめざすもの．体育の科学，25：834-837.

笠井恵雄（1977）体育方法学研究の経過と今後の課題．体育の科学，27：312-315.

松田岩男・宇土正彦編（1988）学校体育用語事典．大修館書店：東京，p. 300.

日本体育学会大会号（第22回大会—第55回大会）

（平成16年11月19日受付）
（平成17年1月8日受理）